

DROP 変数リスト;

機能 :

DROPは直前のステートメントから変数リストを外して、再び実行するのに使われます。ADDの逆になります。

使用法 :

DROPは、回帰式から変数を落し、(コマンドを再びタイプすることなしに) 次の推定を行う便利な方法になります。けれども、この使い方だけではなく、この種のコマンド修正が必要とされるどの様な場合にも使うことができます。

```

コマンド :      DROP  var1  var2      および一連のコマンド :      RETRY
                                                    >> DELETE var1
                                                    >> DELETE var2
                                                    >> EXIT

```

は、両コマンドとも直前のコマンドから最初にあった var1 と var2 を削除して、完全に修正してしまうので機能的には同じになります。コマンドは両ケースとも自動的に実行されます。これらの方法の間の潜在的な違いは(タイプする量を別にして)「直前の」という言葉の定義の違いにあります。行番号引数なしの RETRY はタイプした最後の行を修正すると仮定しています。DROP は行番号引数は要りません、そして DROP(あるいは ADD) コマンドを入力する前の最後の行を常に修正します。

「直前の」方法がこのプロシジャに対して定義されているので、最初の推定コマンドを入力することによって一連の非常に似通った回帰を実行し、その後で一連の ADD や DROP コマンドを行うことができます。それぞれの ADD あるいは DROP は完全にコマンドを変更してしまいますから、新たに修正するときは以前の全ての修正点を考慮して行うようにして下さい。

ADD と DROP を一つのステップで組み合わせて REPLACE 機能を行ったり、コマンドに複合修正をさせることはできませんので注意して下さい。これらをした場合には RETRY を用います。

例 :

```

      OLSQ (WEIGHT=POP) YOUNG,C,RSALE,URBAN,CATHOLIC
      DROP  URBAN

```

と入力すると、2つの回帰を実行します。2番目の回帰は

```

      OLSQ (WEIGHT) YOUNG,C,RSALE,CATHOLIC

```

です。これは又、TSPの内部領域とバックアップファイルの内で修正され置き換えられますから、REVIEWするとコマンドがどのようになっているか分かります。

アウトプット :

DROPは実行される修正済みコマンドをエコーバックします。それ以上のアウトプットは実行されるコマンドを直接実行した結果になります。